

# 状況に応じて判断・行動できる力を育てるボールゲームの学習

名古屋市立杉村小学校 林 輝樹

## 1 この実践を通して、どんな子どもを育てたいか。〈研究のねらい〉

### (1) 育てたい子ども像

私は、小学校高学年の子どもに、ボールゲームの学習を通して、チームのために自分に何ができるのかを判断し、行動（プレー）できる力を育てたい。こうした判断や行動は、人と力を合わせて物事を進める際の判断や行動の仕方に通じており、大切な力だと考えるからである。

### (2) 平成22年度実践を振り返って

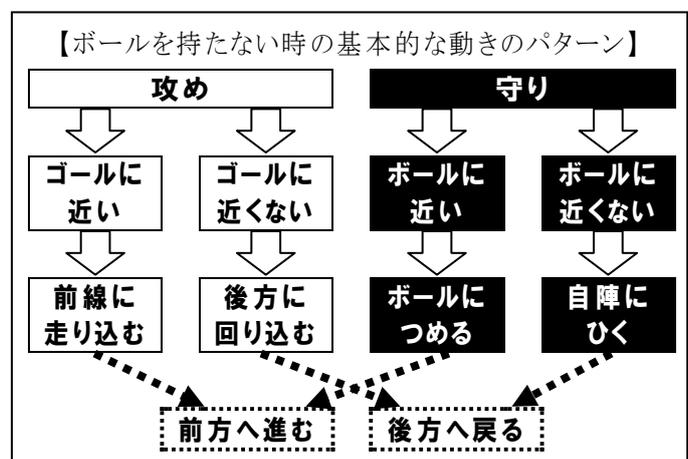
ゴール型ボールゲームの実践では、攻めと守りを固定した状態（セットオフense）から、パスの出し手・受け手としての動きを身に付けることを目指した実践がいくつも紹介されている。私自身もそうした視点で実践に取り組んだことがあったが、そうした指導過程では、オールコートゲーム（攻守の切り替えあり）に移行した際に、“だんご状態”でのボールの取り合いに陥ってしまうことが多く、セットオフenseで学習した動きが生かされないといった子どもの姿が見られた。

そこで私は、ゴール型ボールゲームでは、攻守の切り替え場面における動きが重要なのではないかと考え、昨年度、小学校6年生で実践に取り組んだ。結果として、攻守の切り替え場面での意図的な走り出しを向上させていくことができたが、一方で、もっと下の学年で指導できるのではないかと、指導の適時性について検討していく必要があると感じた。

そこで、今年度は、5年生において、同様のねらいをもって実践を行い、その成果を検討したいと考える。

### (3) 中心となる動きについて

本実践は、ボール運動（ゴール型）領域において、「ボールを持たない時の動き」に焦点をあてるものである。この「ボールを持たない時の動き」の具体的な整理は、平成22年度の林実践を基にし、その中心となる動きを、「攻守の切り替え場面で、ボールを持っていない場合に、前方に進むか後方に戻るかの選択を行い、走り出すこと」と設定する。実際の授業では、守りと攻め



に分けて、具体的な動きを子どもに学習させる。その動きの詳細は、次の表の通りである。

守り	攻め
① ドリブルやパスのコースを消すために、マークにつくこと	① パスコースをつくるために、ボール保持者の横や後ろ側へフォローに回ること
② ドリブルやパスをカットするために、ドリブルやパスのコースとなる空きスペースへカバーに回ること	② ドリブルやパスのコースをつくるために、味方と違う方向へ走り込むこと
③ 攻めより先に、①か②を目的として走り出すこと	③ 守りより先に、①か②を目的として走り出すこと

## 2 授業をどのように計画し、実践しようとしたか。〈研究の方法〉

### (1) 対象学年・領域

5年生（男子17人、女子15人、計32人）・ボール運動（ゴール型）

### (2) 具体的な手だて

#### 手だて1 攻守の切り替えの動きが鍵を握るゲームづくり

ゴール型のボールゲームの中で、指導者が意図する動きを引き出すためには、ゲームの様相を想定し、人数やゴール、ルールなどについて工夫していく必要がある。本実践では、特に、中心となる動き「攻守の切り替え場面で、ボールを持っていない場合に、前方に進むか後方に戻るかの選択を行い、走り出すこと」が、ゲームの中で表出しやすくなるように、次の11項目について工夫した。

	エリアゴールゲーム	パスゴールゲーム
①人数	2対2	3対3
②ゴール	エリアゴール(コート幅×3m) エリア内にボールを置く	エリアゴール(コート幅×3m) エリア内でパスを受ける
③コート	体育館 サイド10m×エンド15m 各ゴールエリア3m	運動場 サイド15m×エンド18m 各ゴールエリア5m
④時間	2分間	
⑤ボール操作	体のどこで触ってもよい(裸足)	足は禁止
⑥高さ制限	手の届かない高さは禁止	
⑦ボール	スポンジボール	ライトドッジ
⑧リスタート	原則その場から	
⑨審判	対戦チーム双方から	
⑩チーム編成	8人×4チーム	
⑪ゲームの進め方	4ピリオド制で、 強いペアから順に	3ピリオド制で、 強いトリオから順に

#### 手だて2 ゲームの中から生じた課題を解決していける授業展開

守り、攻めの立場を限定した中で、攻守の切り替え場面での動きのパターンを増やしていけるように授業を展開していきたいと考えた。そして、課題の提示場面では、前時の子どもの感想やビデオ映像を基にうまくいったことや困ったことを振り返ることから始め、子どもの必要感を大切にしていこうとした。こうした考えを基に、次のような指導計画を作成した。

【指導計画】

時程	ゲーム	学習内容	課題の気づかせ方
9 時間 完了	2対2  エリアゴール ゲーム	守り① ドリブルやパス のコースを消すた めに、マークにつ くこと	マークにつけているペアとマークにつけてい ないペアの映像から比較させる。 発問 「2つのペアのどこが違いますか。」 発問 「どんな守り方をしていますか。」
		攻め① パスコースをつ くるために、ボー ル保持者の横や 後ろ側へフォロー に回ること	ボール保持者の後ろ側へのフォローのない 場面とある場面の映像から比較させる。 発問① 「安全にパスがもらえるのは、どこだと思いま すか。」 発問② 「もらった後の動きはどうするとよいですか。」
	3対3  パスゴール ゲーム	守り② ドリブルやパス をカットするた めに、ドリブルやパ スのコースとなる 空きスペースへカ バーに回ること	カバーの動きがあるチームとカバーの動きの ないチームの映像から比較させる。 発問① 「守り方のどこが違いますか。」 発問② 「カバーする時、どんなことに気を付けてポジ ショニングすればよいですか。」
		攻め② ドリブルやパス のコースをつくる ために、味方と違 う方向へ走り込 むこと	役割を分担して攻めているチームと分担で きていないチームのゲームから比較させる。 発問① 「攻め方の違いはどこですか。」 発問② 「分担する時には、どんな方向に走り出せば よいのでしょうか。」
		攻守 相手より先に 走り出すこと	攻守の切り替えの早いチームの動きを見 せ、気付かせる。 発問① 「このチームのよいところは、どこですか。」 発問② 「ゲームのどんな場面の時、攻守の切り替え を意識するとよいですか。」

(3) 検証方法

ゲーム中の目指す動きをビデオ映像からカウントし、その変容により、学習成果を検証する。目指す動きの条件は、次のように設定する。

- ① ボールを持たないプレイヤーの動き  
(2対2の場合：守り2人、攻め1人、3対3の場合：守り3人、攻め2人)
- ② 攻守の切り替えが起こってから、2秒以内の意図的な走り出し  
(意図的な走り出し・・・指導計画にある守り①②・攻め①②の動き)

3 実践をどんな内容で行い、子どもがどう変容したか。〈研究の内容〉

【第3, 4時】守り①：マークにつくこと

第3時、子どもに、前時の映像の中から、マークにつけているペアとマークにつけていないペアの対戦を見せた。「2つのペアの違いは何か？」と発問すると、

「マーク！」という答えがあちこちから聞かれた。その後、もう一度映像を見返すと、ほとんどの子どもが納得した表情を見せていた。本時の目標を「守りの時にマークにつこう」と確認し、チーム内で2対2の状況で練習に取り組ませた。子どもは、マークにつこうと必死に動いていたが、攻めが1カ所に集まってしまうことや、マークが重なってしまうことから、マークがあまり効果的な守り方にはなっていなかった。そこで、「攻めは少し離れてごらん」と、各チームに声を掛けていった。攻めのパスの受け手が出し手から距離をとるようになると、右の写真のように、攻め2人の間に守り2人が位置するようになった。結果、ボールの受け手に近い守りの1人は、相手がボールを背にして守る状態になった。このこと



【相手を背にしてマークする子どもの様子】

に、この日は指導をせず、授業後の子どものノートに目を通した。子どものノートには、「パスカットできなかった」「ドリブルが止められなかった」といった記述はあったが、マークのポジショニングについての記述は見られなかった。

そこで、第4時に、「マークのつき方」を課題として授業を進めた。結果として、このマークの位置が単元の最後まで課題となった子どももいた。しかし、多くの子どものノートに、「マークする時、相手とボールの両方が見える位置についたらボールが取れた」といった記述が、単元が進むにつれて見られるようになっていった。ゲームを繰り返し行う中で、単元前半に学習した「マークのつき方」の必要性を実感し、理解を深めていった子どもの様子がうかがえた。

#### 【第5，6時】攻め①：ボール保持者の横や後ろ側にフォローに回ること

第3・4時の学習で、マークにつく動きがゲームの中で多く見られるようになった。そこで、このマークの動きが向上してきた状況で、次は、味方をフォローして攻める方法の学習を進めようと考えていた。

授業（第5時）は、ゲームからスタートし、その後、「マークされると、攻めにくくないですか？」、そして、「どうやって攻めたらよいでしょう？」と発問していき、「フォローの動き」に目を向けさせようと考えた。しかし、子どもからは、「ピボットやフェイントをうまくする」といった答えしか返ってこなかった。子どもが、仲間と動きを連係させて相手のマークを突破するという事に目を向けていなかったのである。この状況は予想外だった。

このまま強引に味方をフォローする攻め方の学習へと進めても、子どもにとってそれは必要感のある学習にはならないと考え、もう少し、様子を見てみることにした。授業の流し方を変更し、もう1時間ピボットやフェイントを使って突破する練習を、続けさせることにした。ただ、一言「みんなが楽しめるようにプレーできるようにね」と付け加えた。これがよかった。

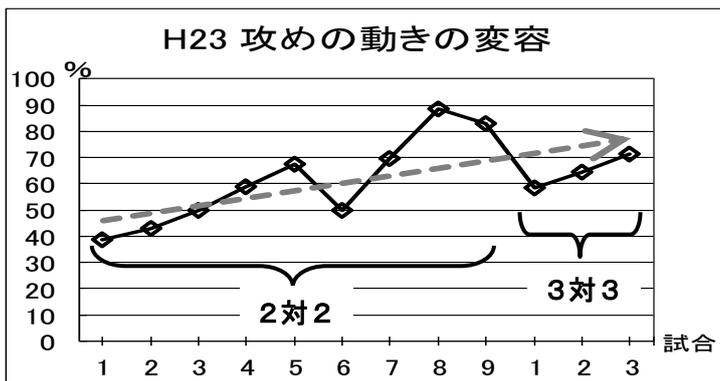
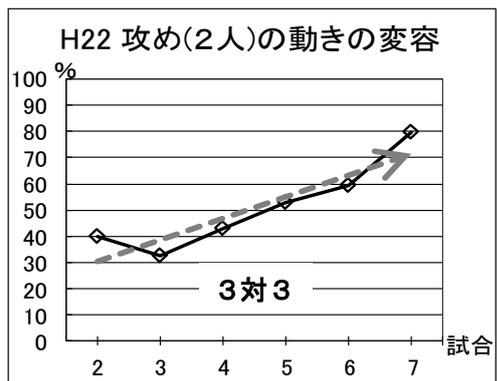
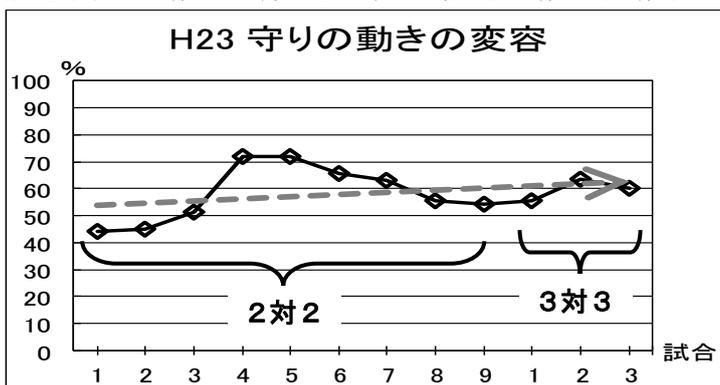
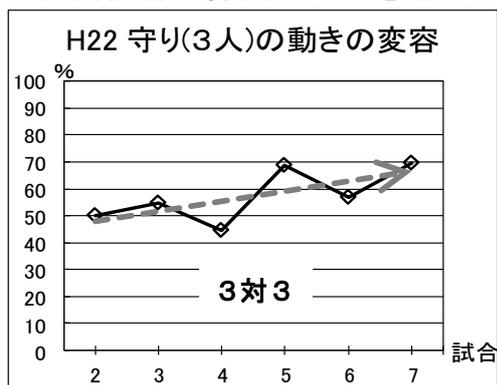
授業後のノートには、「味方がマークされていたから、パスできなかった。」と

いった記述が多く見られた。子どもの視点が仲間と連携して攻めることに向いていったのである。

この記述をきっかけに、第6時に、「ボールを持っている仲間の後ろ側をフォローする攻め方」を具体的に指導していった。結果は、単元終了後のまとめのノートに表れていた。多くの子どもがこの攻め方が勉強になったと記述したのである。

#### 4 実践の結果、どんなことが明らかになったか。また課題は何か。〈研究のまとめ〉

- (1) 6年生実践(H22年度)と、5年生(H23年度)実践の動きの変容(表出割合)の比較  
表出割合の算出方法…意図的な動き出しの数÷(攻守の切り替え回数×人数)



守り、攻めともに、6年生、5年生実践双方で、攻守の切り替え場面における意図的な動きの表出割合が上昇した。この結果から、どちらの学年においても攻守の切り替え場面での走り出しをねらった指導に効果があると考えられる。

守りについて、6年生、5年生ともに、表出割合が低くなる試合(6年生:4, 6試合目, 5年生:2対2の1, 2, 3, 7, 8, 9試合目)があったが、これらのゲームの攻守の切り替え回数は、反対に高くなっていった。これは、攻守の切り替え時の攻めの素早い走り出しに対して、守りが戻るのをあきらめたり、次の攻撃のためにあえて戻らなかつたりといったことが起きていたのだと考えられる。

攻めについて、6年生実践の3試合目、5年生実践の6試合目に、表出割合の低下が見られた。この2試合は、仲間と動きを連携させた攻め方を学習した授業での試合である。つまり、その時間に学習した攻め方をゲームの中で使おうとはしているが、なかなかうまくいっていないといった状況ができていたのである。次の時間から表出割合が上向きに変わっていることから、子どもが徐々に攻め方を定着させていった様子が見えてくる。

(2) 子どもの動きから

(1)のデータを集計する際に、子どもの動きから気付いた点をまとめると、次の表のようになる。これらを、一斉指導や個別指導を通して、効果的に授業の中に組み込み、すべての子どもが目指す動きを身に付けられるようにすることが今後の課題と考える。

	守り	攻め
2 対 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>ドリブルのスピードを緩めるようなマークのつき方を身に付けさせたい。</li> <li>2人が同じ方向に動くと、守れない。</li> <li>2人が3mほど離れた方が守りやすい。</li> <li>マークする相手を背負わないように位置することが大切。</li> </ul>	<ボールを持っていない時> <ul style="list-style-type: none"> <li>サイドステップでの移動は、あまり有効でない。</li> </ul>
		<ボールを持っている時> <ul style="list-style-type: none"> <li>頭上のパスが出てしまう。</li> <li>ゴール側が空いていることに気付かない子ども。</li> <li>1対1の場面で、相手の背後を取れない子ども。</li> <li>ドリブルから止まれない・パスできないといったミスが多い。</li> </ul>
3 対 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>役割意識がないと、ボールの動きに合わせて移動するだけになってしまう。</li> </ul>	<ボールを持っていない時> <ul style="list-style-type: none"> <li>パスを受ける子どもが、ボールに近づき過ぎる。</li> <li>手を挙げてパスを呼ぶ姿は、動きの理解の1つの指標になる。</li> </ul>
		<ボールを持っている時> <ul style="list-style-type: none"> <li>パスコースがつくられる前に慌てて投げてしまう。慌てなくなると、指をさして指示する姿が出てくる。</li> <li>両足を地面に着けたまま無理な姿勢でパスする子どももいる。</li> </ul>

(3) 子どもの感想から

単元終了後、「今回のボールゲームの学習で勉強になったこと」を自由記述で書かせると、右のような結果となった。この結果から、本実践で子どもにとって最も印象に残っている内容は、「スペースやポジショニング」であることが分かる。具体的な記述内容としては、次の3点が多かった。

【今回のボールゲームの学習で勉強になったことは？】

動きについて触れていない記述	8人
ボール操作(ドリブルやパスの操作)についての記述	4人
体の使い方(ピボットやフェイント)についての記述	6人
スペースやポジショニング(役割の分担も含む)についての記述	20人
攻守の切り替えについての記述	4人

※ 複数回答した子どもあり

- ボールを持っている人の後ろ側をフォローする攻め方について
- ボールを持っている相手をマークする時に、間合いを空けることについて
- ボールを持っていない相手をマークする時に、ボールと相手の両方が見えるようにポジショニングすることについて

この3点は、子どもにとって分かりやすく、必要感の大きい学習内容と考える。

(4) 研究のまとめ

2年間の研究を通して、小学校高学年段階において、攻守の切り替え場面に着目して教材化を図る有効性を検証することができた。今後は、ボールゲームの系統性を整理し、より子どもにとって有益な学習となるようなカリキュラムづくりに生かしていきたい。

【参考文献】 鈴木直樹，鈴木理，土田了輔，廣瀬勝弘，松本大輔（2010）  
だれもがプレイの楽しさを味わうことができるボール運動・球技の授業づくり 教育出版

